

まちやむら，そこに住む人びと（＝ざいち）の，
知恵や生き方（＝ち）から学び，実践する活動です。



亀岡フィールドステーション

亀岡の農業と自然 (9) 一春 恋の季節 (続編) 一 京都学園大学バイオ環境学部 大西信弘

水田のキジ

前回のケリに比べると、格段に遭遇率は下がりますが、キジも水田の住人です。水田だけでなく保津川の河川敷でも姿を見ることができます。近くの水田では、畦草が部分的に刈り残されていたことがあって、よくみるとそこにはキジの巣がありました。農家の方がキジのことを思っただけで刈り残されたのでしょう。キジもケリのようにヒナを連れて歩くらしいのですが、まだ、その姿をみかけたことはありません。今回、たまたま、交尾を見ることができたので、その場面を紹介します。大学の近くの水田で観察していると、キジのオス (写真1) に出会いました。そのオスは、2羽のメスを連れていました。遠目に見れば、オスもそれほど派手ではないのですが、近くでそれと分かってみると、オスはやはり派手で、メスは隠れているとわかりにくいというのがはっきりします。しばらくは、それぞれエサをついばんでいたのですが、オスがメスに近づいていき (写真2)、メスが交尾を受け入れる体勢になって、その後、交尾 (写真3) にいたりしました。交尾が終わるとメスは、すぐに離

れていき、オスはしばらくしてから、少しひらけた場所で「ほろうち (写真4, 5)」をしました。ほろうちは、なわばりの誇示とか、メスに対するアピールとか考えられているようです。(2013.4.15 撮影)

保津大橋のイワツバメ

保津大橋の橋の下側のコンクリートの壁面に、イワツバメが営巣しています。数えたところ、ほぼ完全な巣の形をしているものが63巣ありました。イワツバメは、びゅんびゅん飛び回っているので何個体いるのか数えていませんが、全ての巣をイワツバメが使っているのではないようです。この集団営巣地にいるのはイワツバメとスズメです。スズメは、イワツバメが作った巣を使って営巣しています。大学でもコシアカツバメの巣をスズメが使っていることが良くあります。イワツバメとスズメの力関係がどうなっているのかは、ちょっと調べてみないと分かりませんが、写真6を見る限り、イワツバメが文句を言っているのにスズメの方は知らん顔して巣を使っている様子。イワツバメがとまっている部分は土が乾いていないようで、新しく巣材をはりつけている最中のようなようです。このペアが新居を造っているのでしょうか (写真7)。(2013.4.2 撮影)



大川活用プロジェクト平成 25 年度計画の特徴—里に生きる—

京都大学東南アジア研究所 安藤和雄

平成 23 年から、滋賀県守山市の美崎自治会が中心となって進めている「大川活用プロジェクト」に関わっている。平成 26 年 2 月 1 日には第三回となる大川フォーラムが開催された。生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所は、美崎自治会および立命館守山中学校・高等学校、そして守山市とともに「里川里湖のまちづくり」を推進しており、その実施計画書に寄せたのが以下の文章である。二年度目を迎えた平成 25 年度の大川活用プロジェクトの活動の特徴は初年度の里川としての大川への注目から、里にある大川、地域再生活動の一環として大川の活用を捉えていこうという視点が明確になりつつあり、その点に留意して記した。

里川とは身近な川のことです（鳥越皓之 2006）。農村部の自然環境保全の現場では、近年、里川、里地、里湖、里海が里山とともによく聞かれるようになりました。里にある、山であり、川、地（田や畑などの耕地）、湖、海のことです。里とは、国語辞典では「〔郷〕とも書く）山中や田園地帯などで、人家が集まって小集落をなしている所」と説明されています（デジタル大辞泉）。つまり、里川、里地、里湖、里海は、人が暮らしている里にあって、これらの里の自然資源を人が利用し、その過程でつくりだしてきた「自然環境」とでも言えるでしょう。自然環境保全の必要性が喚起され、こうした名称は、保全や改善、利用されるべき自然環境を議論する場合は、対象が明確となって参加者皆さんにその活動をわかりやすくする利点があります。「里川里湖のまちづくり」は、大川を里川、大川が流れ込む琵琶湖を里湖と位置づけ、大川の水質改善を行い再生し、地域づくりに利用することを主な目的として始まりました。

ただし里に暮らす人にとっては、山、川、地、湖、海は実際には個別に存在しているわけではなく、特に伝統的な暮らしの中では、これらの自然環境は資源利用によってつながっていることが多かったのです。美崎でもよく知られているように、化学肥料が一般的に使われる以前は、里湖である琵琶湖では耕地に施す自給肥料として「藻取り」が昔から盛んでした。万葉集の「玉藻刈る」とはこの藻取りのことだと言われています（守山市誌編さん委員会 2006：372-374）。写真は守山市誌からの転載です（同：373）。里では、特徴のある自然環境を里に住む人た



写真：藻取り
（守山市誌編さん委員会 2006：373）

ちがうまくつなげていくことで、「里の総合利用体系」ともいえる循環系を見事に成立させてきたのです。里という総合的な視点なくしてはとてもこうした考えには至らなかったでしょう。大川活用プロジェクトがユニークな点は、美崎の住民の方々が主体的にかかわっていることから、しらすしらすのうちに里という広がり総合的な地域に暮らす視点から大川の活用が考えられていることにあります。

平成 24 年度の大川フォーラムで「大川等整備の基本的考え方」が示されました。特にオープンミュージアム構想に、「里の総合利用体系」という視点が反映されています。平成 25 年度には、その考え方を一歩でも具体化するための事業が計画されています。「地域住民や子ども達の大川への関心醸成のための各種取組」の「夏休み大川自由研究室」（テーマ：『食から知る大川の暮らしと自然』）は中心的な事業として位置づけられています。伊藤潔美崎自治会長が指摘されているように、大川活用プロジェクトは大川の水質改善事業から出発しましたが、美崎という里をいかに発展させていくかという方向性が明確になっています。それが事業として具体的に開始されるのが、平成 25 年度計画の特徴です。活動が質的に広がりをもった年度ということにもなります。この展開は大川活用プロジェクトの根幹には「里に生きる」という美崎の皆さんの自覚が事業として具体化されつつある証でもあります。私はこの自覚がさらに大川プロジェクトを充実させていくと確信しています。

守山市誌編さん委員会 2006『守山市誌 生活・民俗編』 守山市：677 ページ。
鳥越皓之 2006 「序 いまなぜ里川なのか」『里川の可能性—利水・治水・守水を共有する—』（鳥越皓之 代表編集）新曜社：25 ページ。

（以上、『第 3 回大川フォーラム発表資料』より転載）

日本の焼畑におけるカブ栽培（その2）

－温海地区一霞の事例－

京都学園大学バイオ環境学部 鈴木玲治

前回のニューズレター（49号）で報告したように、北陸・東北の日本海側では焼畑によるカブ栽培が現在でも営まれている。これらの地域の焼畑とカブ栽培の現況を知るため、2012年の10月中旬から下旬にかけて、新潟県村上市山北地区山熊田、山形県鶴岡市温海地区一霞、福井県福井市美山地区味見河内を訪れ、聞き取り調査を行った。今回は、山形県鶴岡市温海地区一霞の事例を紹介する。

山形県鶴岡市温海地区一霞

－ブランド力を活かしたカブの加工・販売－

鶴岡市では、温海地区の温海カブ、藤沢地区の藤沢カブ、田川地区の田川カブなど、焼畑によるカブの栽培が盛んに営まれてきた。なかでも温海カブは全国的な知名度が高く、その中心地である一霞集落の温海カブには特に高いブランド力がある。山崎・江頭（2009）によれば、温海カブの名が載る最も古い文献は、庄内地方の村々・町々の名物を記した「松竹往来」（1672）であり、「庄内往来」（1700）、「出羽国風土略記」（1762）にも記載があることから、温海カブは、すでに江戸時代には庄内の特産物として広く知れ渡っていたと考えられる。

藤沢カブ、田川カブはスギ植林地の皆伐跡地に火を入れた焼畑で栽培されることが多いが、温海カブは基本的にススキなどの草地を焼いた焼畑で栽培されることが多い。現在の温海地区では、4～5年程度の休閑期で草地の焼畑を回している。ただし、温海地区においても、スギ植林地を皆伐すれば、山林地主はその跡地で必ず焼畑を行うそうである。火入れの時期はお盆の前後だが、農家毎にバラバラである。早い農家は8/10頃から火入れを始め、遅くとも8/25頃までには全世帯が火入れを終える。



写真1 温海カブ漬加工直売所

火入れ後にカブの種を播き、土をかぶせる。施肥は1回、除草は3回程度である。



写真2 直売所に集められた温海カブ

焼畑によるカブの収量は、1反あたり1t程度である。収穫されたカブはほとんどが甘酢漬けに加工されて売られている。焼畑のカブは、常畑のカブに比べて皮が薄く身がしまっており、しゃきしゃきと歯触りがいいとのことである。自分で甘酢漬けに加工する農家もいるが、多くは温海地区唯一の加工所である温海カブ漬加工直売所（写真1）が買い取る。なお、一霞の温海カブの買い取り価格は、250円/kgであり、温海地区の他の集落でつくられた温海カブの価格（平均200円/kg程度）に比べ、高値で取引されている。

また、温海カブの種は一霞のみで採取されており、他の地域の種は使われていない。山崎・江頭（2009）によれば、一霞以外の土地で自家採種を続けると3年後にはケル（かえる）といわれ、そのカブを「ケリカブラ」と呼ぶ。ケリカブラではカブの下の方が赤紫色に着色しなかったり、根部の長さが本来のものより長くなったりするのである。このため、一霞では種販売だけでもかなりの収入を得ることができ、種販売に特化する農家もある。

このように、温海地区では高いブランド力を背景に多くの農家が焼畑によるカブ栽培に関わっており、現在でも毎年150～200件の火入れ許可申請書が鶴岡市に対して提出されている。ただし、カブ栽培農家数、カブの収量、作付面積ともに15年前頃がピークであり、現在は減少傾向にある。その一番の原因は高齢化と後継者不足である。多くの農家が生業として焼畑を営み続ける温海地区でも、他地域と同様にこのような問題を抱えており、高齢化と後継者不足の解消は、日本の焼畑の将来を考える上で避けては通れない課題であることを再認識させられた。

今回は、福井県福井市美山地区味見河内の焼畑について紹介する。

参考文献

山崎彩香、江頭 宏昌（2009）「山形県庄内地方における在来カブの種類とその利用方法」山形大学紀要（農学）15（4），293-307

催しのご案内

■ 京大生生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所
京滋 FS 事業 第 55 回 実践型地域研究 定例研究会
日時 2013 年 4 月 26 日 (金) 17:00 ~ 19:00
場所 「もやいネット交流空間」守山駅前コスモ守山5番館
発表者 安藤和雄 (京都大学東南アジア研究所)
内容 ①『実践と地域研究における主体と場の問題について—
守山市美崎大川活用プロジェクトを事例に一』

②今年度の活動予定

研究会終了後に懇親会を行います。

★以上の催し物への参加ご希望の方は、必ずご連絡ください。部屋のスペースと懇親会の準備があります。
京都大学 東南アジア研究所 実践型地域研究推進室
担当: 安藤和雄 (ando@cseas.kyoto-u.ac.jp) まで。

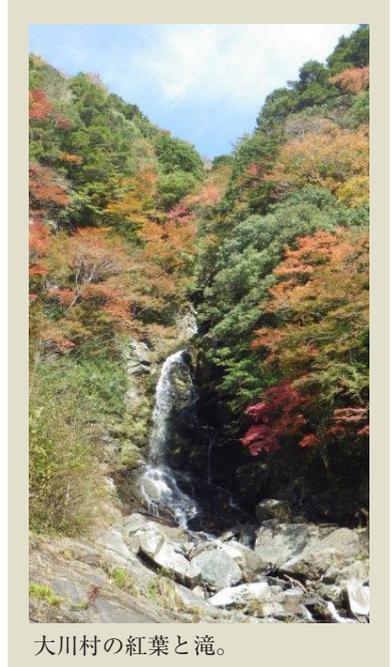
草の根の国際会議 in 高知県大豊町を終えて 東南アジア研究所 安藤和雄

2013 年 11 月 8、9、10 日と草の根の国際会議を高知県大豊町で、高知大学農学部の市川昌広さんのお骨折りで、開催することができました。会議の名称は、『文化と歴史そして生態を重視した もうひとつの草の根農村開発に関する国際会議 in 大豊町』です。草の根の国際会議は、今回で 5 回目を迎えます。今回は、山村での開催ということもあり、過疎と離農がメインのテーマとなりました。

9 日のシンポジウム「アジアと日本の山村で心ゆたかに生きる」の内容は、地元の高知新聞でも大きく取り上げられました (11 月 10 日と 11 月 20 日に掲載)。記事にするというので、シンポジウムにこられていた新聞記者の福田一昂さんからインタビューを受けました。また、後日電話インタビューも行われました。その中で、福田さ

んから「過疎と離農の問題は、日本の中では、今ではそれほど考えられているかどうか……。しかし、本当はグローバルな問題です」という話が発せられました。その通りなのです。電話の向こうから、驚きの声が聞かれ、記事となったわけです。私は、過疎と離農の問題は、日本ではより深刻となっているのにもかかわらず、

慣れっこになってしまったのか、日本の一般の人たちや、マスコミからもニュース性が乏しくなっているという危機感を抱いています。福島原発被害、震災被害の問題が、早くもこの傾向を見せ始めています。少なくとも学術という分野に携わっている私たちは、警鐘を鳴らし続けていきたいものです。特に、日本人は、海外から発信される警鐘には耳を傾けるという美徳(?)があります。私たち海外の地域研究に携わってきた者が、今こそ日本の舞台で活躍が必要とされている時代は過去になかったと私は思います。是非、皆さん、海外からの逆輸入で、日本の社会に警鐘を鳴らしつづけてください。



大川村の紅葉と滝。



稲刈り後の棚田。



怒田の集落の遠景。ここがブータンか雲南の紅河かと錯覚させる。ブータンからきたソナムさんは、ブータンみたい!!と笑って言っていた。



参加者で記念撮影。